

わたしの答えはこうだ。芸術は作為が少ないほど豊かであるとわたしは信じる。レビュー[時事風刺]を上演するミュージックホールは作為がいっぱいあるから貧しい。彫像は作為が極端に少ないから豊かである。不完全であるからこそ芸術は完全をめざす。芸術性を感じる観客の印象は比喻によるものにすぎない。パリ野郎なら美しい自然の花を見て、こう叫ぶに違いない。-ああ、何てきれいなんだ。造花みたいだ。それが造花ならこうだ。ああ、何てきれいなんだ。本物みたいだ。幸せであれば人は言う。バラ色の人生。なぜ言おうとしないのか？幸せな人生と。またこうも言う。純白の声、音のふくらみ、台本のカラー、事件を浮き彫り、思考の重み、心の温かさ。ダンスに関しては音楽用語を使って表現する。比喻=感動。無意識の比喻。観客の感動が比喻によって起こっても当然だ。は、不完全な芸術が別の分野の観念によって、もう一つの世界を見せようとしているにすぎない。たとえば、ある色を色のない形で、ある形の観念を色で説明するといったようなことだ。動きの観念を姿態(アティテュード)で説明したり、姿態を動きで、具体を抽象で、抽象を具象で説明する。おもしろいのはここだ。どらの一点を打つと、どら全体が響き渡る。そういうおもしろさだ。これであり、あれである前に、存在しなければならない。完全なものである前に、芸術として存在しなければならない。純化した動きによって、精神としての生命を呼び覚まそうとするわたしのマ  
イムは、うまくいけば完全な芸術となるだろう。

「マイムの言葉-思考する身体」 エティエンヌ・ドゥクルー 1998年 ブリュッケ  
p.50-51 完全芸術である以前に、芸術それ自身であること 1942年

